

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo.37（2016年6月号）◆

梅雨時の憂鬱な候ではございますが、皆様にはご清栄のこととお慶び申し上げます。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。『Intelligence』第16号のご感想はいかがでしたでしょうか。次号の投稿も9月末をめどに募集しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。最近では白山真理先生に、研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【第103回研究会】（6月4日（土）午後2時30分～5時30分）

・進藤翔太郎（京都大学人間環境学研究科博士後期課程）「戦後日本を舞台とした米ソ情報戦の幕開け—引揚・復員を視座として—」は、CICによるシベリア抑留帰還者に対する尋問・監視資料の分析を通じて、1945年から50年代にかけて日本で展開されていた米ソ情報戦の側面を論じてくださいました。

・井上祐子（京都外国語大学非常勤講師、東京大空襲・戦災資料センター主任研究員）「文化社撮影写真の概略と歴史的意義—『東京復興写真集1945～46』を中心に—」は、『東京復興写真集 1945～46 文化社がみた焼跡からの再起』の「街頭風景」「復興祭・行事」「社会事業・戦災者」「文化・教育」「公園・寺社・建物」の資料を紹介しつつ、カメラマンのまなざしや足取りから、戦時下と占領下の変容を再構成して見せてくださいました。

・原田健一（新潟大学人文学部）「東方社から文化社へ—占領期の映像の戦線—」は、占領期における映像の欠如、あるいは占領軍による検閲・没収による映像の不在を補い得る資料として、占領下に文化社のカメラマンが撮影したが使用できずに残されたネガからのデジタル化の持つ意味、文化社のネガ映像における地域性（場所性）を考察していただきました。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。  
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

20世紀メディア研究会は、7月2日（土）藤元直樹氏、大城由希江氏、鈴木規夫氏にご報告いただき、以後、10月29日（土）、11月26日（土）に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 [m20th@list.waseda.jp](mailto:m20th@list.waseda.jp) まで、メールにてご一報下さい。

なお、今年は研究会100回記念として、9月に記念展示会と国際シンポジウムを計画しております。またご案内させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

【コラム：気になる新著】

木下千花『溝口健二論 映画の美学と政治学』（法政大学出版局）は、気鋭の映画研究である。第6章「占領下の女性解放——大衆フェミニスト・プロパガンダとしての溝口映画」、第7章「欲望の演出（ミザンセヌ）と妊娠の身体」、第8章「伝統と近代——溝口健二のポスト占領期」をおさめ、GHQ占領期のメディア政策、映画政策と溝口健二の葛藤・交渉のダイナミズムを分析する研究としても興味深い。占領期資料を精査し、映画においてCIEの「教育指導」は強制的に企画の変更、シナリオの書き直しにつながったこと、また映画に関

しては CIE と CCD の協議の過程が資料として残されていることなどから、CIE と CCD のはたらきかけを総合して「検閲」と解している点なども、示唆されるところが多かった。他に、戦後詩に屹立する荒地派の詩人を読み直した樋口良澄『鮎川信夫、橋上の詩学』（思潮社）、押田信子『兵士のアイドル―幻の慰安雑誌に見るもうひとつの戦争』（旬報社）、20世紀メディア研究会での発表と『Intelligence』寄稿論文の成果も生かされた滝口明祥『太宰治ブームの系譜』（ひつじ書房）など、収穫が多い。

〔6月30日付 文責・川崎賢子〕